

2024年7月9日

八代市長 中村博生様

瀬戸石ダムを撤去する会

共同代表 出水晃、上村雄一、本田進

連絡先 869-0222 熊本県玉名市岱明町野口 927

TEL:080-3999-9928 FAX:0968-72-5604

E-MAIL: tsuchi_tk@yahoo.co.jp

瀬戸石ダム問題に関する申し入れ書

私たちは、先月、貴職に対して、2020年7月4日の球磨川豪雨災害では、瀬戸石ダムのせいでダムの上流では最大7メートル近く、水位が上昇したという計算結果を掲載した情報誌「瀬戸石通信」第12号を送付しました。この球磨川豪雨災害時、ダムの下流では、JR瀬戸石駅が跡形もなく流されてしまいましたが、これは瀬戸石ダムの放流によるものとは考えられません。国土交通省やダムを管理運営する電源開発株式会社や河川管理者の国土交通省は、私たちのこの主張に対して、ダムによる水位上昇は無かった、下流の被害はダムの放流によるものではないという納得できる根拠・理由を提示出来ていません。

貴職は球磨川豪雨災害発生以降、新聞紙上で、荒瀬ダムが豪雨災害時に存在したらどうなったかと思うかという質問に対して、「専門家ではないからわからないが、荒瀬ダムがあったらあんな氾濫はなかったんじゃないか、という思いを持つ方はいるんじゃないか」と述べました。また、瀬戸石ダムが被害拡大の原因ではないかとの指摘に関して、「瀬戸石ダムに反対する人たちがそうおっしゃるのかもしれないが、私はそう思いません。ちょっとは（氾濫に対する）壁になってくれたんじゃないか。自分なりの検証はできませんが」（2020年11月26日付け朝日新聞）などと述べていますが、この考えは全くの誤りであり、無責任極まりないものです。

仮に荒瀬ダムが存在していたなら、豪雨災害時、荒瀬ダムと瀬戸石ダムの間の地区は荒瀬ダムが水を堰き止めることによる水位上昇と瀬戸石ダムの放流によって過去にない被害が発生したことは間違いありません。荒瀬ダム下流も荒瀬ダムが無くてもあれだけの被害が発生したことから、荒瀬ダムがあったら、過去にない放流で大被害が発生したことは間違いありません。貴職はダムに対する考えを改めるべきです。

ダムに反対する人たちとどう向き合っていくかという質問に対して「話をするしかないじゃないですか（中略）反対のみなさんの思いをどれだけ組み込めるかは、やってみないとわかりません」（同新聞）などと述べながら、豪雨災害発生以降、ダム問題に関する申し入れの場に出て来て、住民の声に耳を傾けようとしたことは一度もありません。

貴職が瀬戸石ダム問題への考えを改め、住民の声に真摯に向き合うよう申し入れます。

以上